

IFIP/TC13とHCI研究の国際的連携

黒須正明

静岡大学情報学部情報科学科

IFIPのTC13はHCIに関するTCであり、本研究会とも密接な関係があるにもかかわらず、これまであまりその点について関係者に認識されてこなかった傾向がある。そこで、本年2月に実施された会議の報告とあわせて、その活動内容などを紹介する。

IFIP/TC13 and the international alliance of HCI studies.

Masaaki Kurosu

Faculty of Information, Shizuoka University

Email: PFD00343@niftyserve.or.jp

This is an introduction on the activity of IFIP/TC13 to the members of SIGHI of IPSJ.

1. IFIPのTC

IFIP (International Federation for Information Processing)は、情報処理に関する国際組織であり、日本の代表組織として情報処理学会が加入している。そこにはTC (Technical Committee)が全部で13ある。各TCには日本からも代表が選出され、三浦日本代表のもとに委員会を編成し、活動を行っている。報告者は昨年10月からTC13の日本代表となり、前任の山田中京大教授から業務を引き継いだ。

2. TC13の成立

IFIPの中でインタフェースの問題が取り上げられるようになったのは、1970年代後半のWG6.3 (Man-Computer Communication)の編成に遡る。また、1981年にはIFIPのHuman-Computer Interaction GroupのニュースレターとしてINTERACTが創刊された。WG6.3はアメリカにおけるHCI活動の立ち上げにも協力し、1982にはHuman Factors in Computer Systemsという学会の開催を支援した。これが現在のACMのSIGCHIの発端である。いいかえれば現在ではHCI研究の中心的存在となっているSIGCHIの母体はIFIPにあったといえる。

その後、コンピュータと社会を扱うTC9や、情報システムと組織を扱うTC8のWG8.2と連携しながら、WG6.3は順調に発展してきた。1982年には、Human-Computer Interactionに関するTG (Task Group)が編成され、1984年には最初のINTERACTの大会がLondonで開催された。1989年にはTGからTCへの格上げが行われ、ここにTC13が成立した。代表は、初代のBrian Shackelから、現在のJudy Hammondに移っている。

3. TC13の活動

TC13が取り扱う課題は、(1)人々がコンピュータに関して直面する問題、(2)コンピュータが個人や組織におよぼす衝撃、(3)ユーティリティやユーザビリティなどの決定要因、(4)コンピュータと人間との作業の適正配分、(5)よりよいシステム設計のためのユーザのモデル化、そして(6)コンピュータをユーザの特性や欲求に適合させること、である。

このように、TC13のスコープは人間を中心としたものであり、そうした性格は、主催する国際学会であるINTERACTの内容にも反映されている。したがって、HCIに関するCHIやHCI Internationalなどのアメリカの学会が技術志向的であるのに対し、いささか異なる方向性を持っている。

INTERACTは、1984(London)、1987(Stuttgart)、1990(Cambridge)、1993(Amsterdam SIGCHIと共同でINTERCHI'93となる)、1995(Lillehammer)、1997(Sydney)と、基本的には隔年で開催されてきた。だいたい150件程度の発表があり、300人から600人程度の参加者を集めている(INTERCHI'93は例外)。

またTC13には4つのWG(Working Group)がある。WG13.1は、HCI教育やHCIカリキュラムに関するもの、WG13.2は、ユーザ中心的なシステム設計の方法論、WG13.3は、HCIと障害、WG13.4は、ユーザインタフェース工学をそれぞれテーマとして活動している。

当初14ヶ国でスタートしたTC13は、現在では25ヶ国から構成されている。アジアからは、日本の他に、中国、インド、シンガポールが参加しているが、残念なことにいずれもあまり活発に動いてはいない。なお、日本は1990の初回の会合から参加している。

TCの委員会は、年2回開催され、INTERACTと同時に開催されることもあれば、独立した会合として設定されることもある。委員会では業務連絡の他、参加した委員によるワークショップが開かれる。その具体的内容については、次節の報告を事例として参照していただきたい。

その他、TC13では、INTERACTというニュースレターを発行したり、各国でのHCIグループの設立を援助したり、その活動を経済的に支援したりしている。本年7月に情報処理学会の主催で開催されるAPCHI'98も、そうした支援をいただき、単に協賛になってもらうだけではなく、発展途上国からの参加者に対する経済的支援のプログラムに関してサポートを得ることができた。

4. TC13第13回委員会の報告

本年2/18からアムステルダムの自由大学において13回目の委員会が開催された。出席者は座長と書記を含めて1

5名で、欧米の委員が大勢を占めた。

内容は、(1)事務連絡と打合わせ、(2)ワークショップ1:TC13のホームページ作成について、(3)ワークショップ2:今後の活動計画について、(4)ワークショップ3:組織運営について、であった。以下に項目順に報告する。

(1) 事務連絡と打合わせ

前回の議事録承認、財務状況の報告、各ワーキンググループの活動報告、新規ワーキンググループの提案の審議、INTERACT'97の報告、APCHI'98の中間報告、次回の委員会開催予定などが議論された。

INTERACT'97の報告では、開催規模や収支報告などが行われた。参加者は会議が298名、チュートリアルとワークショップが225名、重複を除くと全体で366名だった。発表件数は160だったが、採択率や応募数についての数値は報告されなかった。

APCHI'98については情報処理学会が主催である関係で、その大会委員長を兼ねている報告者が中間報告を行った。締め切りの時点で100件ほどの応募があり、学会としての水準を維持するために2倍程度の採択率を維持しようと考えていること、採択されなかった論文を特別ワークショップのような形でまとめ参加者数の維持を図ろうと考えていること、などを報告した。

また財政面が問題で、企業の補助金を仰いでもぎりぎりの状態であり、最終的な収支の見通しは直前にならないと分からないことを報告した。それに関連して、特にアジアからの参加者について予想される経済的な理由からの取り消しや無断欠席を防止するために、経済的な援助を考えているが、現在の運営状況では数に限りがあることを述べた。それに対し、座長のJudy Hammondと書記のBrian Shackelから、IFIPやUNESCOからの補助が可能であることが示唆され、さっそくその申請を行い、現在までに、IFIPから2000スイスフランの支援をいただくことができた。なお、将来のAPCHIが隔年開催になる可能性があるとの報告に対しては、やはり隔年で開催されているINTERACTと交互に開催されることになるのは望ましいとの意見が出された。

(2) ワークショップ1:TC13のホームページ作成について

TC13のホームページの原案が提示された。開発はイギリスとスウェーデンの共同作業の形で行われている。TC13の事務的内容や委員の構成、ワーキンググループの活動紹介など、TCの内部向け情報と、世界中のHCI関連リソースを掲載するという一般向けの情報の両方を載せる予定である。後者については、論文や学会発表の情報と研究者のディレクトリを掲載する計画があったが、論文や学会発表については著作権の問題があるためアブストラクトを掲載するか、単にリンクを張るだけにするかは継続審議となった。この点については、情報処理学会としても、例えばHI研究会での発表や全国大会のHCI関連の発表情報をどのように取り扱うかを検討していく必要がある。

(3) ワークショップ2:今後の活動計画について

INTERACT'99はイギリスで開催されることが決定しているが、INTERACT'2001の開催候補地について審議がされた。最初は座長のJohn KaratからACM/SIGCHIとの共催という形で北米で開催する提案がなされたが、開催時期が同学会で異なるため会員に混乱を起こす可能性がある、開催規模が違うためINTERACTがCHIに吸収されてしまう危険がある、予稿の提出手続きに同学会で違いがある、技術中心のCHIと理論や人間的側面を重視するINTERACTでは考え方に違いがあり一貫した査読が困難

と予想される、といった指摘がなされた。その結果、次の候補地としてPrague, Vienna, Italyがあげられたが、座長からアジア地区、たとえば日本で開催するのはどうかとの打診を受けた。実施すれば日本のHCIコミュニティに大いに寄与する可能性があるという個人的意見を述べたが、最終的な回答は保留した。この点については、開催する場合には情報処理学会が開催母体となり、HI研究会がその実行母体となると考えられるので、情報処理学会のIFIP委員会で審議をしていただくと同時に、同研究会や関連する研究会の意向も反映する形で慎重に決定を行いたいと考えている。

(4) ワークショップ3:組織運営について

2つの点が審議された。1つはTC内部でのWG間の協力関係についてであり、HCI教育に関するWG13.1はTC3と、ユーザ中心システム設計に関するWG13.2はTC8のWG8.1と、障害者ユーザの問題に関するWG13.3はTC9のWG9.2と、ユーザインタフェース工学のWG13.4はTC2のWG2.7とWG2.9と、またTC13は全体としてTC9のWG9.1と連係しながら活動しており、また今後も積極的に連係を推進することが確認された。なお、今回新規に提案されたWG13.5については連係活動の可能性はまだ審議されなかった。

もう一つは関連学会の件である。この問題はインタフェースという概念をどう捉えるかという考え方に関連している。コンピュータを中心にしてその技術的側面を考えるSIGCHIとは異なり、人間を中心に位置づけて考えるTC13としては人間工学や作業環境などを含めた広いスタンスでインタフェースの問題を考えるべきだとの意見が圧倒的だった。その意味では現在IFIPに参加しているコンピュータ関連の学会（日本では情報処理学会）だけでなく、人間工学の学会などもTC13のメンバーに含めたらどうかとの意見が出され、書記のBrian ShackelからIFIPの規約を確認したうえで、そうした形での運営の可能性もあることが指摘された。この問題は、日本に関していえば、SICEのヒューマンインタフェース部会や、ソフトウェア科学会のWISS、あるいは日本人間工学会のインタフェース関連の研究会もTC13の活動にリンクしていく可能性を意味している。この問題はTCの運営の根幹に関わることから、今後も慎重に検討を進めることになった。

(5) その他

既にWGとしては4つ(今回提案分を含めれば5つ)あるが、報告者はインタフェースにおける異文化間の問題を取り扱う新しいWGの提案を検討している。この問題は、アメリカを中心にして開発されてきたインタフェースをどのように各国にローカライズすべきかといった観点や、どのようにして世界規模で一貫性のあるインタフェースの方向性を確立するかといった観点から議論される必要があり、インタフェースの基本コンセプトについてこれまで受け手の側に立ってきた日本としては、今すぐにも検討を開始する必要があるといえる。

5. TC13と情報処理学会の今後のあり方

このように、人間中心というスタンスを持つTC13が日本のHCI研究者と交流を活性化させることは、当地におけるHCI研究に新しい視野を開く可能性を含んでおり、INTERACT'2001の開催の件や、新しいWGの開催などの案件を通して、積極的に関与していくことに意義があると考えられる。またローカルなHCI活動に対する支援についても大変積極的な姿勢をもって行うため、それ以外の面でも協調していくことはメリットが大きいと考えられる。